
私と彼と音楽と

広雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼と音楽と

【Nコード】

N8387F

【作者名】

広雪

【あらすじ】

私こと、陽菜は無意識のうちに、恋に恋していた。そんな陽菜が気になる相手とは――同じクラスで幼なじみの洋一？ いやいや…みんなの人気者の広都？ いやいや…それとも、誰が住んでるかも分からない、あの家の住人？ さあ、今から私は『恋』を始めます！！！！

プロローグ

――あ、まただ。

そこで私、こと渡瀬陽菜^{わたせ はるな}は足を止めた。

陽菜が足を止めた場所――それは、古いけれどしっかりと建てられた、木造建築の家の前だった。もちろん、自分の家なんかじゃない見知らぬ他人の家だ。さらに言うと、この家の住人が誰なのか、住人の顔すらまともに見たことがなかった。しかしそれでも、陽菜は家の外からその家の様子を伺うことを決めたのだ。

陽菜はじっと耳をすませた。ポカポカの陽気をあてられて、思わず目をつむってしまう。

じっと動かずに待っていると、耳の中にある音楽が流れ込んできた。

――今日もあの歌か…。

陽菜はそこで息をゆっくりと吸った。

『気付けば後ろの席
用も無いのに振り返ってばかりだった

いつもチラ見で

あなたのことはつきりと見ることもできなかった

好きになったら負け

誰がそんなの決めたんだろ

あまりに本当すぎて

涙が止まらないんだけど…

※好きです 会いたいです

そんなたった少しの言葉が後少しだけ言えないんです

手を繋ぎたいです

笑いあいたいです

そんな夢が

いつか本当にならないかな…

お別れなんて言いたくないそれでも
別れはあと少し先のこと

いつも交わす挨拶

少しの会話　それがもうすぐで思い出に変わる

さよならで終わり

なんて簡単な恋なら

もうとっくに捨てきれたはずなのに…

※リピート

いつの日か

あんなことがあったね、

なんて思えるようになるまで

私はあと何回涙を流せばいいんだろう？

※リピート

あなたを本当に忘れることができるまで…

それまであなたを

好きでいいですか？
』

陽菜はこの曲を最後までしっかりと聞いた。そして最後までこの曲を聞き終えると、まるで自分の役目を果たしたかのような、すっきりとした顔をして学校へと歩き始めた。

恋 恋 恋

私には

恋なんてできないって思ってたの

恋なんて自分には関係ない、

って

興味なさそうな顔してたの

ほんとはね

いつかどこかで出会えるのかもしれないって、

多分…心のどこかで期待してたの

物語のような

甘い甘い砂糖のような

苦くてまずいコーヒーのような

そんなそんな

『恋』に

そうしてやっと巡り逢えた…

物語のような甘い展開だった？

苦しくて辛い思いをした？

そうして出会えた

『あなた』に。

渡瀬陽菜、18歳。

私は初めて『恋』をします。

第2話【猫と私と】

陽菜がその家を見つけたのは、つい最近のことだった。それは陽菜の高校生活が残り一年をきった時でもあった。そしていつからか、少しずつ気温が上昇していき桜の花もいつの間にかに散っていた。そんな春の日に、陽菜はその家を見つけたのだった。

その家は、のちに陽菜が恋をするきっかけとなる舞台であるのだが、今の陽菜にそんなことが分かるはずもない。とにかく――陽菜はその家を見つけたのだ。きっとそれは【運命】で。

陽菜は毎朝、友達の水瀬由美みなせゆみと学校に行っている。二人は別々の中学出身で、高一の時に同じクラスになった時から仲よくなった。一年の時に、同じ部活に入るようになったことから、さらに一緒にいる機会が増えた。よく話しているうちに、実はお互いの家が近所であることも知った。それからは二年間、お互いにたいした用事が無ければ一緒に学校に行くようになっていた。

そして三年の春――

陽菜と由美はともに理系組で、三年連続同じクラスとなった。

二人はその日も、同じように徒歩で学校に向かうはずだった。

いつもと同じように。

いつもと同じ朝で。

運命はこの日に起こったのかもしれない。始まったのかもしれない。
警報なんて何もなかった。

誰がこの日が運命の朝だったなんて、気付くことができよう…？

陽菜は予告の合図も何も分からないまま、運命の朝を迎えたのだ――
――。

その日はたまたま、由美から『寝坊したから、先に行つて』、というメールが送られてきた。そのために、陽菜は一人で学校に行くはめになったのである。登校時間に余裕があるわけでもないのに、陽菜は憂鬱そうな顔をしながら、鞆を持って家を出ることにした。

由美がいないから。そんな理由で、朝からわざわざ他の友達を誘うのも気が引け、陽菜は仕方なく一人で登校することにした。

別に家から学校までの距離はそう長くないため、歩くこと自体は対して辛くはなかった。

が、一人で登校してるところを同じクラスの人に見つかることが嫌

でたまらなかった。

陽菜はいつも通っている道の途中で、動いていたはずの足を止めた。

――どうしよう？

このまま公園の横をまっすぐ進めば、大きな交差点へとつながり、それを右に曲がれば、すぐに学校へ着くことができる。

でも、その通路で、誰にも会わない、なんていう保証は百パーセントできない。なぜなら、その道を利用している、高校生が多いからだ。

――ましてや今の時間帯だし――…!!

陽菜が携帯を開くと、時計はまだ七時十分を指している。それでも陽菜は重いため息をついたのだった。

陽菜の通っている高校は、進学校であり、県内では偏差値が高いと少しは有名である。

しかしそのために、毎朝の登校時間は七時三十分までと決まっている。朝から課外、という制度があり、受験生である三年生にとってはそれは大事な時間であるのだ。しかし陽菜にとって、その時間までに起きて学校に行く準備をする、という行動は非常に怠いことなのである。それは――、

…ただでさえ課外あるのに――…。学校行くのしんどお――…。

陽菜は自覚してはいるのだが、大変ズボラで怒りっぽい性格であった。それに付け加え、人見知りで、落ち着きがない。母親には女の子より男の子を産んだみたいない気分よ！と度々に言われる。陽菜はそれを素直にはいと言えるほど大人な性分ではない。しかし、だからと言って否定できるほどのこともない。そんな風に母親に言い寄られてしまったら、大人しく黙っているのが利口なんだと最近気がついた。それかゆつくりとその場を離れることも良案だと今朝思いついた。朝から母にズボラすぎることを指摘された陽菜は、一人で見つからずに学校に行くには、どうしたものかと頭を悩ませ、地

面へと目を移した。

二、三分後であろうか。

急に陽菜は誰かの視線を感じた。ふと顔を上げてみると、そこにはオレンジ色の小さな子猫がいた。くりくりとした大きな緑色の目に、ふさふさとした毛皮が、かわいいと感じられる。

陽菜は猫が大好きであつた。

それゆえに、陽菜は無意識のうちにその猫のところへと歩みよっていた。

触りたい、と思った陽菜がすうっと腕を伸ばすが、猫はするりとその手を逃れた。猫はさっと、陽菜の横を通り抜けると、公園の横の細い路地に逃げて行った。

――あーあ…
行っちゃった…。

陽菜は少し寂しく思いながらも、猫が消えて行った、細い路地をまじまじと見つめる。

陽菜はこの道の先に、今まで行ったことがなかった。

細い路地の先は道が曲がっているため、そこから先はつながっているのか、行き止まりなのかもわからない。

陽菜に十分な時間はなかった。

しかし、陽菜の好奇心が貴重な朝の時間に勝ってしまった。

陽菜は、じっとその路地を見つめた後、猫を追いつけて見ることができた……。

第3話【ユキと私と】（前書き）

前回出したのより少し改筆しました。

第3話【ユキと私と】

もしもあの時：

あの道を選ばなかったら：

私の運命は変わっていたのかな？

陽菜はしばらく時間が過ぎた後にあの猫を追いかけたのだが、その猫はすぐに見つけることができた。

——あ、いた。

猫はどこかの家の前で、ひなたぼっこをしていた。
目をつむって、気持ちよさそうにごろごろとしている。

——かわいい——！！

陽菜は懲りないようで、また猫のもとへ、ふらふらと近寄って行った。

しかし、今度は猫は逃げようとしなかった。
目は警戒しているものの、まだ地面に横たわったままで、動く気配すらなかった。

……うわ、ふさふさ……！！

陽菜は笑顔を零しながら、思う存分猫を触りまくった。猫も嫌がるそぶりを見せず、ごろごろと喉を鳴らしてみせるほどだった。

やがて猫はすくっと立ち上がった。

陽菜が行く先を見守ると、猫は、陽菜の目の前にある古い、木造建築の家へと入って行った。

――古い家だな…。

陽菜がその家を見た、初めての感想だった。

その家は古い木造で、壁の青いペンキの部分は剥がれかけていた。屋根である部分も、雨や何かの影響でボロボロになっていた。

それでも、その家は我が物顔でがっしりと建っている（陽菜にはそう見えた）。

新しい家が続いているなかで、唯一この家だけが、リフォームも建築も直されていなかった。

— 一家主がわざとしないのか、面倒くさいからなのか…

それは陽菜にとってはわかるはずもない。

でも、陽菜がこの家に興味を持ったのは確かである。

みんなが変わっていくなかで一人だけいつまでも変化しない。悪くいえば取り残されている。よく言えば…

「……って!!」

そんなことを考えてる場合じゃなかった!!

陽菜は慌てて、今まで来た道を戻ろうと後ろを振り返った。

その時だった。

ある曲が、陽菜の耳の中に流れ込んできたのだ。

陽菜は足を止めた。
それは多分：意識的に、ではなかった。

――あ：ユキの歌だ

ユキとは今、巷で話題となっている女性歌手である。若者以外にも支持率が高く、男性・女性共に人気がある歌手だ。しかし、ユキはどの番組にも顔を見せたことがないため、言葉で表すと、まさに声だけで勝負をしているのだった。

今流れているのは、ユキの「恋と君へ」という曲である。この曲はつい最近売り出されたばかりで、CMにも使用されている。そのこともあり、ユキが出している曲で有名な一つでもあった。

陽菜もまた、この曲が大好きで、このCDはもちろん、今まで売っているCDを全て買っているというほどだった。

—この家の人も、ユキが好きなのかな？

陽菜はそんなことを考えながら、その曲を聴き入った。

第4話【ユキと恋と】（前書き）

前回出したのを少し変えました。

第4話【ユキと恋と】

『気付けば後ろの席
用も無いのに振り返ってばかりだった』

いつもチラ見で
あなたのことはつきりと見ることもできなかった

好きになったら負け
誰がそんなの決めたんだろあまりに本当すぎて
涙が止まらないんだけど…

※好きです 会いたいです
そんなたった少しの言葉が後少しだけ言えないんです

手を繋ぎたいです
笑いあいたいです
そんな妄想が
いつか本当にならないかな…

お別れなんて言いたくないそれでも
別れはあと少し先のこと

いつも交わす挨拶
少しの会話　それがもうすぐで思い出に変わる

さよならで終わり
なんて簡単な恋なら
もうとっくに捨てきれたはずなの…

※リピート

いつの日か
あんなことがあったね、
なんて思えるようになるまで
私はあと何回涙を流せばいいんだろう

※リピート

あなたを本当に忘れることができるまで

それまであなたを

好きでいいですか？
』

この曲は、学生時代の自分の片思いをイメージしたのだ、とユキの歌詞カードに記されていた。

陽菜にとっても、これは結ばれなかった恋で、所謂せつない系に部類されることは分かっていた。でも陽菜は、今までに失恋や片思いなどを味わったことがなかった。

別に、モテるから、告られても断っているから、といった理由ではない。（そういった経験がないわけではないが…）

男子をカッコイイと思ったことがない！とは完全には言い切れないが…

「○○君はカッコイイよね」

「◇◇君は性格良いよね」

という女子の反応が、全く理解できないからだ。

——人が何かに熱中してる姿って、みんなカッコイイもんじゃないかな？

性格だって、合う人もいれば、そうでない人もいるんだし…。

別に自慢じゃないが、陽菜だって今までに二、三人くらいには告られたことがある。しかし、その度に同じ理由で断っているのだ。

『私なんかのどこがいいの？』

『どうして私なの？』

『人を『好き』になるってどういうことなの…?』

そして相手が必死になって答えを返すと、

『ごめんなさい。だけど私はあなたに対してそこまで思うことはできない』

と締めをくくる。
毎回同じ答え。

…つまり、陽菜は、好きな人がいたためしがないのだ。

いつか運命の人が現れるから！

とか

私には恋なんて考えられない！

などではない。

純粹に、異性に興味がないのだ。

カッコイイなら、すごいね、で終わり。

性格良いならよかったね、で終わり。それ以上何も思わない。

陽菜はユキの曲が好きではいたが、歌詞に書かれてある気持ちまでは、読み取ることができなかった。

――恋がしたくない、わけではないんだよな…。

でも、もしかしたら、恋も知らないまま…このまま大人になっていくのかな、とさえ考えたことがある。

陽菜は自分だけが恋に無関係な存在だとすら思っていたのだ。

このまま、どこか客観的に第三者的な存在として恋を見ていくだけなんだろう、と。自分には何も関係ないだろう、と。

これからも、ずっと。

実行しようにも想う相手がいない。

行動に移す気力もない。

結局はいてもいなくても、変わらないんだ、と。

誰かをカッコイイと

誰かを素敵だと

誰かに会いたいと

思うことは確実にないだろうと…

そう諦めていたのだ。

そう、

彼に出会うまでは。

第5話【私と学校と】

陽菜はその曲を聴きながら暫くのあいだ、物思いにふけていた。

恋を知らないまま大人になる――。

それが悲しいことなのか、果たしていいことなのかは、今の陽菜に
到底理解できるものではない。

だからといって恋をしようと、焦る理由にもならない。

――何がしたいんだろう、私？

陽菜は無意識に自分自身に問いかけていた。

だが、やはり簡単に答えを見つけることはできるはずもなかった…。

と、突然陽菜は大事なことを思い出す。

――学校！！！

陽菜は慌ててもと来た道に戻ろうとする。が、何か思い立ったように、動き出した足を、ぴたっと止める。

陽菜は再び方向転換すると、先程まで進んでいた、道の先をじっと見つめる。

…先に繋がってるかは分からない。
残り時間も限られている。

しかし陽菜は一步を踏み出すことに決めた。

先のことは陽菜に分かるはずもない…。

でも、

きっとこれは、

陽菜にとって
自分で見つけた

初めの一步。

踏み込んだ勇氣。

一
二
間に合った……！！！！！！

陽菜は息も切れ切れに、校門の前を通過した。予鈴に遅れはしたものの、本鈴にはまだ間に合いそうだ。

陽菜は息を整えながら、靴箱に向かう。予鈴を過ぎただけあって、そこにはちらほらしか生徒はいなかった。靴を履き変える時にも気付いたのだが、クラスメイトは勿論のこと、同学年は誰一人としていない。

陽菜は小走りで階段を駆け上がった。

陽菜は自分のクラスに掛かっている、3－5という標識を見ながら、そのクラスの中に入って行った。

全員はそろってはいないものの、生徒はほとんど揃っていて、みんな席に着いて、ペチャクチャお喋りに夢中になっていた。こっそり黒板の方を見てみるが、幸い教師はまだいない。

「おはよう、陽菜」

席に着いた陽菜に、一番に声をかけてきたのは由美だった。腰の近くまである長い茶色の髪を、風になびかせながら優雅にやっ

てきた。

「オハヨー」陽菜は抑揚の無い声で、棒読みで返事を返した。由美は、綺麗な歯を輝かせながらニッコリと笑う。

「陽菜、棒読みすぎだって！」

由美はさらに頬を緩ませた。

「それは悪うございました」

陽菜はペロっと舌を出して、おどけた表情をしてみせる。

「もう…！ところで…なんで今日あたしより遅かったの？」

遅れるから、先に行っててっていうメール…来なかった？

由美は不安そうな顔で尋ねる。

それに対して陽菜はいいや、と手を振りながら答えた。

「まあ…いろいろあってさー」

陽菜が由美に今朝のことを説明しようとした時だ。

「はいはい！ 席に着く――！！」

担任の芝香織しばかおりがずかずかと教室に入って来たのだった。

後でね、と由美は目線で合図を送ると、自分の席へと戻って行った。

第6話【由美と私と】

香織は、今日の注意事項や時間割の説明について話し始めた。特にいつもと変わった様子はない。

みんな軽く聞き流す程度に話を聞いていた。

陽菜は、端っこの一番後ろの席であることを利用して、今朝のことを振り返っていた。

――そういえば…、あの家…

ものすごく気になる！というわけではないが、またあの家に行ってみたいな、と陽菜は考えていた。

あんなところに同じファンがいたなんて…！！

陽菜は悔しいような、それでいて少しうれしいような、そんな不思議な感覚に満たされた。

…同じユキファンがいた!!

どうせなら、知り合いになりたいなあ…。

ほくほくとした気分で考えを膨らませていく。

――でも…どうして今まであの家に気がつかなかったんだろう？

陽菜は至極当たり前な疑問へとたどり着いた。

別に遠いってわけじゃないんだけどなあ――…。

陽菜ははあっ、とため息をつく、窓の外に目を移す。ポカポカと照らされた陽気に、輝く視界。学校の外にある木々の木漏れ日がきらきらと差し込まれてきた。

ぱつと見たら美しい景色だと思いかもしれないが、陽菜にとってはただの見慣れた風景でしかない。

――あーあ、なんかつまんないな…。

陽菜は急速に、先程までの穏やかな気持ち失われていつていることに気がついた。

あの家のこと考えてる間は楽しかったのに……。

陽菜は自分で自分が分からずにいた。

――私どうしたんだ??

…と、そこで陽菜は頭に、ぴしっと痛みを感じた。

「いっつっつ!!」

「そこ!話し聞いてんのか? 渡瀬!」

香織の声色が教室中に響き渡った。陽菜は驚きを隠せずにながら、遠くで睨んでいる香織を見返した。

机の上にくろくろと転がっているチョークが目に入った。どうやらあれが頭に当たったらしい。

「…ったく、話しくらい聞かないか…」

そうため息をつきながら、香織は再び話しを始めた。その間にチョークをじっくりと観察する陽菜。

——いっただあ!!

ってか、あんなところから狙ってくるなんて…コントロールすごっ
!!

陽菜が軽く感心していると、くすくすと小さな笑い声が聞こえてきた。

陽菜はぐると辺りを見渡すと笑いをこらえられずにいる、由美の姿を発見した。

――後で覚えとけよ……!!

陽菜は由美に復讐することを決意した。人はこれをただの八つ当たりという……。

「……だからゴメンって!!」

由美は手を合わせながら陽菜に謝っていた。陽菜はつーんとそっぽを向いていて、怒っているような顔をしている。香織の話しが終わり、由美が陽菜の席に来た時から、陽菜はずーっとこの調子でいた。

「はーるーなー!!」

由美はもう半ベソをかいている。

もともとそこまでは怒っていなかったので、許してあげることになった。

「さっき私のこと笑ったからだよ!! 天罰だ、天罰!!」

べーっと舌を出すそぶりをする陽菜。

由美は、やっと許せてもらえたと顔をほころばせた。

「だって…陽菜の反応楽しかったんだもん」

「あ! そんなこと言うならまた無視してやる!」

陽菜の言葉に由美は慌てながら、

「冗談だってば…!! ところでさ、…なんで今日遅刻したんだっけ？」

と話題を変えた。

陽菜はどうも腑に落ちない気分ではあったが、渋々と今日の出来事について話し始めた。

「なんか…面白そうな話しじゃない？」

陽菜は、今朝見つけた猫と家と、そしてユキの曲が流れてきたこと

についてを話した。しかし陽菜は先程感じていた、家に対する不思議な気持ちまでは伝えなかった。由美に話すと、厄介なことになるのは、目に見えているからである。

…その理由は、すぐ後にわかるだろう…。

とりあえず…、話を聞き終えた由美は、ほうとため息をつきながら、先程の言葉を陽菜に向けたのだ。

「そっかなあ？」

「もし！相手が女なら――友達になれるかもしれないでしょ？」

「うん」

陽菜の問いに素直に頷く陽菜。

「もし！相手が男なら――」

そこで由美は、わざと間を開けた。

「恋できるかもよ?」

陽菜はやれやれとため息を尽きながら尋ね返した。

「∴私と由美があんなに憧れてる?」

「私と陽菜があんなに憧れてる」

由美は頷く。

「あの胸が苦しくなるっていう? ご飯も喉に通らないっていう? あの少女漫画の定番の『恋』?」

「そう」

由美はさらに深く頷いた。

「その『恋』」

——私が…『恋』???

「あははっ!!」

由美の真剣な顔を見たら、陽菜は思わず笑ってしまった。

「ありえないって!!」

「なんでそんなこといえるのよー」

由美は口をへの字に曲げる。そんな由美をよそに、陽菜はまだ笑いが止まらずにいた。

「そんな少女漫画みたいな展開がーそうそうあるわけないでしょ！！」

「そんなこと…分からないじゃない…」

由美は口を尖らせながらぼそぼそと呟く。

先程陽菜が由美にあの気持ちを言わなかったのには、こういったことになると思ったからである。由美は陽菜に『恋』をさせたがる。自分も彼氏がいないくせに、そんなことよりも陽菜が『恋』をしてくれるほうを願っているのだ。由美もまた、自分が『恋』の第三者の立場だと思っているのである。

由美の機嫌が悪くなったのを察知した陽菜はひとまず笑うのを止めた。しかし顔がまだひくひくとしていて、それがかえって不気味な様子となっていた。

――こーの、乙女思考が…！！

陽菜は心の中で由美に悪態付きながら、やれやれと口を開いた。「私が恋なんてできるわけないでしょ……由美がー恋してます……！っていうならわかるけど……！！」

由美は同性の陽菜から見ても憧れる存在であった。美人で優しく、スポーツ万能で頭もいい。

テストで、学年三百五十人中、毎回十位以内をキープしているし、同じ女子サッカー部で、陽菜とともに一年から今までずっとレギュラー入り。ポジションはMF。司令塔で、キャプテンも任されている。月一で告られることは当たり前。入学時もあるんな部から、マネージャーにならないかと勧誘がきたほどに美人で気が利く。

そして本人の最大の魅力は、それを本人が自覚していないということである。三年間、ずっと友達を続けてきた陽菜だからこそそれは断言できる。

由美は自分で自分を作っていない、天然素材なのである。

「あたしが？あたしが恋できるわけないでしょ」

由美は笑顔で否定した。由美もまた恋をしたことがないのである。

――ああ、この無意識な笑顔に男はやられるのか…。

と陽菜は一人で納得した。

――私が男なら確実に惚れてるな…。

「寧ろ私の方がありませんっの」

陽菜はやれやれとため息をついてみせた。

「あんたねえ…」

陽菜が話しを続けようとした時だ。

「なんの話してんのー？」

低いけれど、はっきりとした声が陽菜の背後から尋ねてきた。

陽菜はぴくりと眉を動かすと、後ろを振り返ることなく、

「あんたに言っていないから、洋一^{よういち}」

と冷たく言っただけだ。

第7話【洋一と私と】

「お前、それはないだろ…!!」

陽菜に対して怒る少年。

それを軽く流す陽菜。

まあまあとなだめる、由美。

少年の名前は木村^{きむら}洋一^{よういち}。短い髪を茶色に染めていて、ワックスで固めている。顔立ちがよくて、背もそこそこ高い。ぱっと見たら、モデルととらえることもできる。

陽菜とは小学校からの付き合いで、いわゆる幼なじみという間柄である。そして由美、洋一、陽菜の三人は、この三年間、偶然にも、ずっと同じクラスメイトである。

「シカトすんなよ、陽菜！」

「うっさいなあ…」

迷惑そうな口調で、陽菜は洋一を軽く睨む。そんな洋一も、負けて

たまるか、と睨み返す。

つい最近のことであるが、洋一が家を引越したことによって、陽菜と洋一は家が近所になった。それ以来、陽菜と洋一は前より顔を合わせるが多くなり、陽菜は、洋一と付き合ってるのではないかと、誤解を受けたほどである。陽菜にとってはいい迷惑だ。陽菜だって、先程から言っているが彼氏が欲しくないわけではない。それなのに、洋一と家が近所で幼なじみということだけで、勝手に自分は洋一とくつつけられているのだ！

おまけに洋一のファンからは妬まれるわ、家まで追い掛けられたことすらあるわで、洋一と一緒にいて、いいことなど何一つない。むしろ害ばかりだ。

「あんたには関係ないでしょ」

「…少しくらい教えてくれたって！…水瀬さんは教えてもらえてたじゃん…！！」

「あんたに言ったら馬鹿にされるから、いや！」

べえっと舌を出す陽菜。

一見おちよくってるかのように見えるが、陽菜は内心焦っていた。できるだけ早く、洋一と距離を置きたいのだ。

――ほらほら…睨んでるよ!!

洋一ファンの視線がひしひと突き刺さる。陽菜は見えていない振りをしているが、今にも洋一ファンから、舌打ちされないか冷や冷やしていた。

しかし、それに対してなんにも気付くことなく、洋一は齒向かってきたのだった。

「馬鹿にするか! 少しくらい…教えてくれたっていいだろう!!」

「うっさいな! 誰が教えるか!!」

二人は火花を散らしあって睨み続けていた。そして陽菜は、やはり焦り続けている。

――早く引っ込んでよ!!

しかし、陽菜と洋一が口喧嘩（痴話喧嘩？）しているのに対して、陽菜が思った以上に周りは特に気にしていなかった（洋一ファン以外だが…）。

…またやってるよ…。

と呆れた目で眺めているだけであった。止める人はいない。ただ、少し陽菜を睨みつけている子が数名いるだけだ（これが洋一のファンなのだが洋一は全く気付く様子はない…）。

洋一がけしかけ、陽菜が挑発にのる。または陽菜がけしかけるのに対して、洋一が挑発にのる。

と、これが日常茶飯事だからである。

由美は微笑みながら二人を見て、

「本当に仲がいいね」

とくすつと笑った。他のクラスメイトは心の中で（まったくだよ…）と、同意する。

「「どこが！！？？」」

二人は同時に由美を睨む。そんな二人に、由美は慌てながら、

「だって…本当にそう思えるんだもん…!!」

と答えた。二人はお互いを指差しあいながら、

「「こいつの方が性格悪いから…!!」」

とほぼ同時に答える。今度は、二人ともお互いを睨み合い、
「真似すんな…!!」と言い合う。そんな二人に、由美は苦笑ざる
をえなかった。

陽菜はいつしか洋一をかやの外に追い出すことを止め、洋一と口喧
嘩することに熱くなっていた。それを笑いながら見る由美。

いつもと同じ。

いつもと同じ仲間。

同じ風景。

こんな関係がずっと続くんだ……って思ってた。

でも、

当たり前だけど――

気付いていない間に

人は成長していったね。

第8話【私と荷物と】（前書き）

えー、すみませんいろいろと設定を変えました。補足ですが、陽菜と由美は女子サッカー部で、由美がキャプテンで陽菜は部員。あとは西野君の名前を、広都に変えました。前回と比べていろいろと変更してすみません…。

第8話【私と荷物と】

「よいしょ…っ!!」

陽菜はそこで、今まで運んでいたはずの荷物を下ろした。ふう、とため息をつく、今まで運んでいたそれをしげしげと眺める。

それは、担任の香織から教材室に運ぶよう頼まれた、英語の教材だった。ダンボールの中にびっしりと詰まれた本の束を見て、陽菜はよくぞここまで運んでこれたものだ、と、一人感心する。

そもそもなぜ陽菜が今荷物を運んでいるかというところ…、

午前中の授業を終えた陽菜が、由美と一緒に弁当を食べようとしているところだった。

がらりと教室のドアが開かれると同時に

「渡瀬ー」と間延びした声が聞こえてきた。陽菜と由美は声のする方に視線を移す。そこにいたのは担任の芝香織だった。香織はボブより少し短い髪を掻きむしりながら

「ちょっと来い」とみるからに怠そうに呼んできた。

ちょっと、ってどんくらいですか？

と陽菜は頭の片隅に疑問符をつけながら、今まで持っていた箸を置くくと、渋々と香織の待つドアのところへと向かった。

「何ですか？」

と陽菜が問うと、香織は元からの垂れ目をさらに垂らしながら

「お願い！」

と語尾にハートマークが付きそうな勢いで首を傾げた。二十台の女がやる仕種か？というツツコミはあえて伏せておく。

香織は確かに二十台中間の女性ではあるが、見た目が若く、髪も短いためによく少年か？と間違えられるのだ。そして中身も全くといっていいほど女性らしいものでない。

授業中に居眠りや私語なんかしていた日には、香織はぶち切れる。運がよくてチョーク当たりだ（陽菜は今日それを初めて体感した）。そのせいかは分からないが香織は未だに独身であり、陽菜以上に『恋なんてどうでもいい』、と考えている人であった。しかし、さばさばとした性格で、生徒の変化に気付きやすい人だから生徒たちからは人気がある。陽菜も香織を慕っている生徒のうちの一人だ。だけれどたまに陽菜は考えてしまうのだ。香織は自分の未来の姿を表しているのではないか…、と。それは果たしてうれしいこと、だけ、なのかは分からない…。

まあ、そんな香織が人に甘えてくるということは…、陽菜はこれからのことを大体予想していた。香織は彼女自身の姿で隠されていた教材を指差す。この時点で陽菜の予想が確信に近づいた。

「これ…、教材室まで運んでくれる？」

香織が甘えてきた時点で、何かあるとは思ったが…。陽菜はあから

さまに嫌そうな顔をしたので、香織は陽菜の頬っぺたをむじきった。

「わたひ、ひようかひえんひやくひゃ、ひゃいふえふうよー（私教科連絡じゃないですよー）」

頬っぺたをむじきられているので物凄く話しづらい。陽菜は、むごむごと口を動かした。

「んなの…分かってますよー…。…お前今日授業中…あたしの話ずっと聞いてなかっただろ？」

思わず心臓がどきりとする。

「ひゃっへ…、あたひにもひろひろあるんでふうひよ…！」

そこで香織はむじきるのを止めた。

「ちゃんと話せ…！」

誰のせいだ…！誰の…！

「…ただ眠たかっただけですってば…」

陽菜は頬っぺたをさすりながらぼそりと呟いた。

「ほんとか？」

香織がまるで睨んでいるかのような目つきで問い掛けてくる。身長は陽菜より低いはずなのに…この威圧感なんなんだ？

「な、…んでも…」

そこでなぜか、頭の片隅にユキの曲が流れ込んできた。

思い出すのは――、

あの家。

「なんでもないですよ…」

「そうか…」

香織はそれ以上問い詰めようとはしなかった。そのかわりに、陽菜にニカリと笑いかけてきた。

「困ったことがあったら…あたしに言いなよ…」

「先生…!!!」

その言葉によって、陽菜は感動した。

…先生っていい人…!!

陽菜は香織のことがさらに大好きになった。

次の言葉を聞くまでは。

「というわけで…これ運んでおいてね」

香織はにっこりと微笑んだ。

「え？」

「心配してあげたんだから、さ。御礼にこれ教材室に運んでくれよ」

陽菜が返事を返すよりも早く、香織は進行方向に体を向けた。

「じゃあ頼んだ」

香織はもう一度、頼んだぞ、と言うとすたすたと教室のドアの前からいなくなってしまった。残ったのは、陽菜と香織によって残された教材。

教材室って…一階にある？（※ここは四階）

しかもこれ…

女子一人で？（※ダンボールにぎっしりと詰まれた参考書）

え？

その前に…

私の感動は？

ていうか…

最初からこれが目的？

…、

陽菜は

「ちくしょうー！！」

と教室で叫び声をあげた。

――ま、いろいろとあったな…。

ようやく一階へとたどり着いた陽菜は、あははと苦笑いをしながら、思い出を振り返っていた。学生にとって貴重な休み時間を奪われ、さらに四階から一階まで自分は用もないのに無駄に動く、という労力を使った。おまけに由美は、忙しいから、という理由で手伝ってくれなかったのも、一人で運ぶはめになった。

陽菜は、無理矢理笑う、とことしかできなかった。

あ、あはは…。

それは端から見たらおかしな光景であろうが、幸いにもそれを見ている者は誰もいなかった。

陽菜は最後の踏ん張りだと、もう一度荷物を持った。今まで気にはしていなかったが、これは結構重い。くっ…！！

これ絶対女子に頼むの間違ってるよ、
先生！！

陽菜は悪態をつきながらも、あと少し！　とよろよろと足を進めた。

そうしてようやく見えた一筋の光――

教室……！！

神様！！
私やりました！！

陽菜はぱあっと笑顔になると、先程より足を急いだ。

――やっと終わった……！！！！

「渡瀬！、何やってんだ？」

声を掛けてきたのは同じクラスの男子。

「別に……」

陽菜は苛々とした調子で返事をした。みるからに怒っていますよオーラを発していて、他の人から見たら、あまりにも陽菜は近寄りがたかった。実際、陽菜は今、人と話したい気分ではなかった。しかし、そんな様子に気がつかない少し間の悪い男子は、またもや陽菜に話しかけてきた。

「なんでお前教材室の前にいるんだ？」

陽菜はぴくりと眉を動かすと、また

「別に…」とだけ言った。

「そ、そっかあ？」

男子は陽菜にぎろりと睨まれたので、これ以上は危険だと察知したのだろう。

「じゃあな」と言いながらそそくさと去ってしまった。陽菜はそれを妬ましそうに見つめると、またもや

「ちくしょう…」と呟いた。それは先程と比べて、大分小さい声だったが…。

なんで教材室閉まってんのよ——！！

たどり着いたばかりの陽菜は、何度もがちゃがちゃと、ドアノブを回したが、ドアは開かない。八つ当たりといわんばかりに、ドアに軽く蹴りをいれた。そんなことしてもドアが開くはずもなく——…、陽菜の足を痛めただけであった。

先生――！！！！

鍵は職員室にあるはずだが、職員室はなんと……三階にあるのだ。陽菜はがっくりと首を落とし、荷物を近くに放っておくと、ずるずると壁に寄り掛かった。

――あーあ……。

なにかもが、だるくなってきた陽菜は軽く目を閉じた。

——ん？

目を閉じた瞬間、人の話し声が入ってきた。陽菜は辺りをきょろきょろと見渡すと、声の聞こえてくる方に向かって足を進めた。

たしかこの辺りから——…。

そう思いながら足を進めると、靴箱のところへとたどり着いた。陽菜がそこで目にしたのは——…

二人の男女の姿だった…。

第9話【私と告白と】

陽菜の視線の先にいるのは二人の男女。

二人はお互い距離を縮めないまま黙っていて、きまらずそうに立っていた。

——これっていわゆる……

『告白』シーンっていうやつ??

まあ、よくあるのは、主人公が片思いしている子が学園のマドンナに告白されて、主人公はショックのあまりに逃げ出す、というのが定番だ（残念ながら、本編の主人公こと陽菜にはそういう相手がないので、いまひとつ盛り上がらないが——）。。

とりあえず、陽菜が見つめる先では、何年生かはわからないが、二人の男女が見つめあっていて、どちらかが口を開くのを待っているという状態であった。

先に口を開いたのは、女の方だった。ぼそぼそと喋っているが、少

しくらいならこちらからでも声が聞きとることができた。

「…っと、好きだったの…」

— あんまりこういうのは見たらダメなんだよね…。

わかってるつもりだが、陽菜はどうしてもその光景から目が離せなかった。

— 別にちゅーとかしてるわけじゃないし…、いいよね？

誰にでもなく言い訳をしながら、視力1.5と、僅かな音も聞き漏らすまいと耳をフル活用してそれを見つめ続ける。

女の子は必死になってか細い声をあげた。

「…あたしじゃダメかな…？」

今にも泣きそうな、か弱い声に、陽菜の方が思わず「そんなことないよ！」と言ってしまいそうになる。しかし男の子の方は困ったような声で

「ごめん…」とだけ呟いた。

——おいその男!!
空気読め! 空気!!

恋愛初心者の私のために(?)、ここはOK出しましょう!!

陽菜はいつのまにか見えていないはずの、女の子の応援をしていた。
そして顔の見えない男に対しては、怒りが沸いた。

『告白は勇気がいる——』

そう陽菜は、昔誰かに教えてもらった。自分の思いをぶつけるのは
大変なことなんだと。
相手に必ずしもOKがもらえるとは限らないし、例え成功したとし
ても、未来はどうなるのかはわからない。

ずっと思いが続くのか——
諦めて次の恋愛をするのか——。

例え思いが続いて結婚したとしても——そこで人生は終わりじゃな
い。寧ろ始まりだ。

陽菜たちはまだ子供で――：未来のことなんか考える余裕もない。
だから、例え付き合ったとしても、それは一時的なものに過ぎない
かもしれない。勘違いなのかもしれない……。

そこまで深く考えているはずはないが……少女は『今』、彼を求めて、
思いを伝えたのだ。短い人生という中で、出会えた奇跡。そんな風
に、精一杯思いを伝えている少女の姿を見て同情しないものか!？
いや……普通するでしょ!!！

陽菜が一人でうんうん、と納得していると、男の子の方がそつと女
の子の方へと近寄って行った。

なかなか良い雰囲気になりだす二人。

――女の子がうまくいくといいのに……。

陽菜はこっそりと、その場を後にすることにした。

荷物が置いてある、教材室の前まで戻ってくると、しばらくの間、陽菜はぼーっと過ごしていた。

――あれから、うまくいったかな…？

少年の

「ごめん…」の一言が頭に突き刺さる。

どうして世の中ってこう…うまくいかないんだろうな…。

はぁ、とため息をつく、そろそろ鍵取ってくるかぁ、と思い、寄り掛かっていた壁から立ち上がる。

するとちょうど、バタバタと、どこからか走ってくる音が聞こえてきた。

――うっさいなあ…。

だんだん近づいてくる足音に、陽菜は誰が来るんだろう？ と足音の聞こえてくる方向を見つめる。

その子を見たときに、陽菜は驚いた。

「朝陽ちゃん！？」
あさひ

それは三年生の中でかわいいと有名な、吹奏楽部に所属している朝陽あさひだった。ピアノや習字も習っていて、家がお金持ちらしく、見るからに守ってあげたい！お嬢様タイプの子だ。くりくりとした大きな目に、ウェーブがかかった、色素の薄い茶色のロング髪。由美が綺麗系というのなら、こっちはかわいい妹系だ。朝陽もよくいろいろな人から告白されている、モテ女である。

そのモテ女こと、朝陽を見て、陽菜が驚いたのには理由があった。

――な、泣いてるよ――！！

朝陽の大きな目には、今にも零れ落ちそうな涙が輝いていた。陽菜は今まで、朝陽と特に喋ったことはなかったが、今はどうしても声をかけずにはいられなかった。

「あ、朝陽ちゃん…？」

どうしたの？と陽菜が尋ねる前に、朝陽は陽菜の存在に気がつかないまま、なにも言わずに走り去ってしまった。

陽菜はその横顔にどこか見覚えがあった。そして朝陽が走り去った後に、それがなにかを思い出した。

『あたしじゃダメかな…？』

――さっき告白してた女の子！！

あれはきつと朝陽だったのだ。陽菜は一人納得すると、なぜか、自然と怒りがわいてきた。

あのかわいい朝陽ちゃんを……！！！！

振った馬鹿は誰だ！！

陽菜は別に朝陽が好き、というわけではないのだが……、同じ女という立場として怒っていたのだった。

するとまたもや誰かの足音が近づいて来た――…。

もしかして朝陽ちゃんを振った馬鹿！？
うっしや……顔を見せなさいよ！！

コツコツコツ――…

ごくりっ！

思わず唾を飲み込む。
そして現れたのは――：

「渡瀬さんどうしたの？」

「に、にしの西野君……」

現れたのは背が高く、すらりと長い足をした男。目はぱっちり

二重になっていて、鼻筋も整っており、ワイルド系の洋一に対して爽やかな部類に入る、美形。

彼の名前は西野^{にしひろと}広都という。

陽菜たちと同じクラスメイトであるが陽菜はあまり絡んだことがなかった。

喋りにくいから、というわけではない。むしろ、彼は誰にたいしてもフレンドリーであった。その上、由美よりも頭がよく（学年一位は広都なのだ）、スポーツ万能で、所属しているサッカー部では、何十人という中のキャプテン謙スタメンレギュラーで、すでに有名大学から特待でこないかと、誘いがきているほどだ。

しかし洋一同様に、彼女を作らない主義らしく、そのために毎日毎日、放課後は彼のためにあるといってもいいほど、彼は呼び出しを受けていた。そして洋一よりも明らかに人数の多い、フアンクラブまでが結成されているという…。正直、陽菜には洋一や広都のどこがいいのか理解しがたかった……。さらに由美までもが広都を意識しているというから、驚きだ。由美は、好きではないが、彼氏にするならあんな人がいいな！と陽菜によくぼやいているのだ。

だからといって、男から嫉妬を受け、嫌われているというわけでもなく…、それ以上に彼は学校中の人気者であった。確かに、性格も明るくて、気がきいていて、やさしいとくれば誰だって最高に思うだろう。先生からは頼りにされ、友人からは一目置かれ、他人から

みたらまさに完璧な人！

だけど陽菜は広都が苦手だった。嫌いではないが、苦手だった。ただでさえ、由美や洋一とともにいることで、目立っているのだ。特に取りえがない陽菜にとって、それは迷惑でしかない。

だから陽菜は、あまり広都に関わったことがなかった。というか、陽菜の方が必要以上に近寄らなかった。

陽菜は人見知りはしない。ただ、人気者が苦手なのだ。

自分でもひねくれているのはわかっているが、こればかりは治しようがない。陽菜はそう開き直れるほど、広都が苦手だった。

苦手だったのだ――。

同じクラスの有名人。
そんな彼が妬ましかった。

この気持ちに名前をつけることができるなら、
私は絶対
『嫉妬』
と答えるだろう。

そうして陽菜は
心の中で

『嫉妬』

という種を捨てたのでした。

陽菜はその気持ちを放っておくことで、それがこれ以上悪化しないだろうと、考えていた。

でも、

種を捨てただけで
花が咲かない、なんて…

誰が決めた？

さあ

このまま種のまま終えてしまうのでしょうか？

それとも…？

第10話【渡瀬陽菜】（前書き）

前回の続きではなく…、これまでのまとめみたいな感じですよ。

第10話【渡瀬陽菜】

えーと、前回に引き続き…

こんにちは、

(一応) 主人公の
わたせはるな
渡瀬陽菜です。

前回までの説明、

なんていうと多分長くなるので…、この回では、今までの話を少しだけ簡潔にまとめる！&補足を付け足す！という内容をお送りいたします。

今回は私——陽菜が進行を進めますが…、これから度々こういったものをいれていきたいそうなので…、次は誰が来るのか、私もよくわかりません。とりあえず、今から始まるこの話を見ていってください！
たらうれしいです！

それじゃあ…いきますよ。

私こと渡瀬陽菜は、普通の進学校に通っている高校三年生。

…『自分のことを詳しく言え』！？

…そんなこと言われてもなあ…。作者が私の容姿について書かなかったから悪いのに…。

…はいはい、言いますよ…。

髪は、入学したときは真っ黒だったんですけど、今は少し日に当たりすぎたせいかなあ…。？ちよっと茶色に近いかも…。外でする部活だから、しかたないっちゃしかたないんですがね…。でも校則が厳しくて、いつも生徒指導の先生に私は捕まっているんです…。地毛なのに…。

で、肩につくかつかないかくらいの長さでストレート。

目は…垂れ目ってよく言われるんだけど、そこまで垂れてはいないような…、んで…、

あ！

あとはまつげ長いねってよく言われます！

マッチ棒…、

マッチ棒乗せられます！！

ていうか…他に特別目立ったところはないので、顔はふつーの、じみーな顔を想像しててください。

『身長』は

そこまで高くはないけど…一応百六十は越えています。

『体重』！？は…もちろん秘密です…。

…当たり前じゃん！

『趣味&特技』は…女子サッカー部に入っていて、だから…サッカーするのが趣味になるのかなあ…？

んで、特技は…、リフティングかな？一応、連続で百回以上はできます。あ、ちなみにポジションはDFです。

『サッカー好き？』って…もちろん…大好きです！！

『家族構成』？

えーと…父と母と私の三人家族で、学校からものすごく近いところに住んでいます。父は会社員で、母もアパートの仕事をしていて二

人としよっちゅう家にいません。

…これくらいでいいのかな??

じゃあ、話しを進めますが…、このように、高校三年生!! 部活も恋も頑張っちゃいます!! という青春時代! であるのにもかかわらず…、なんと、私は今まで恋をしたことはありません。

部活命!!

だからっていうわけじゃありませんよ…。

サッカーは好きだけどそれは今は別として考えてね…。

そりゃあ少しくらいなら、

この人カッコイイ！
すごい！

なんて思う人はいましたよ。

でもそれで『終わり』。

その人を見ても、それ以上にドキドキしたり、緊張したりする、といった症状が出てこないんです。

あ、断っておくけど、女が好き！というわけではないからね！
私結構さばさばした性格で誰とも付き合ったことがないから…たまに勘違いされるんです…（大きなお世話！！）。

…でもどこかで、恋に憧れてる反面、もしかしたらそれは、私にとって関係ないことなのかもしれないと感じている自分もいるんです。
だから私は、今まで恋をしたことがなく…、つまり付き合った人いません…。

恋はしてみたいけど、それ以上先に進みたくない…。

…矛盾してると思うんですが…本当にそう思ってるんです。

は！！

しみりしちやって、ごめんなさい！！

え、と…

次いきますね!!

次!! えーと…

ある日、私が一人で学校に行く途中!

かわいい猫を発見!

もちろんついていきましたよ!

そこで見つけたのが青くて古い木造の家。

そこから流れてきたのは、私の大好きな音楽――。

ぎりぎり遅刻そうになりながら、学校にたどり着いた私は、早速友達にそのことを話します。

その友達いわく、

『恋』をしたんじゃないか? ということでしたが、そんなわけないよ、と答える私は結構その家が気になっていたり…。

ま、多分それ以上深く考えなくてもいいですね!!

次いつちやいます!!

…次は『主な登場人物について、少しでも紹介』をさせていただきます。

——こんなことしたら…ヒーローもばれるんじゃないかあ…?

ま、いいか…な？

『水瀬由美』
みなせゆみ

へえー、由美もこの話に出て来てるんだあ…。

高校から仲良くなった私のクラスメイトで親友です。由美も…私と同じような感じで、今まで付き合った人はいません。でも!

美人で優しくて頭もよくて気がきいていて…サッカー部(女子)のキャプテンで…、ぶっちゃけ私は由美を尊敬してます。

本人には言ってませんけどね…。
由美の話はこれくらいかなあ――？

あとはそれぞれが自分で話してくれると思うので、待ってて下さい。

次は…

げっ！！！

私の幼なじみの

『きむらよういち木村洋一』！！

うわぁ…こいつも出て来るんだ…。

頭は私と五分五分なほど平凡だけど、…ちょっとかっこよくて背も高いから、私とは違って…昔からモテてるんです。洋一は、中学校まではひよいひよいと誰でも…来る者拒まず！の勢いで付き合ってたくせに、高校に入ってからそれがぱたと止んだんです…。

女関係がなくなった洋一は…今現在、付き合っている人はいません。…まあ、私には関係のないことですが…。

あ！

私は本当に嫌なんですけど!!

私と洋一と付き合ってるのではないかとよく言われるんですが…。

正直――：冗談じゃない!!

私たちは本当に幼なじみで家が近いっていう設定だけなんです!!

――まったく誰がこんな噂、言い始めたんだか…（※由美です）。

まあ私情は置いといて…、

私は果たして誰かと恋をできるのか!? というのがこの話の目的だ
そうです――：。正直、私には有難迷惑な話なんですけどね…。

はいはい…話を進めますよ…。

えーと…どこまで話したっけ…。

あ！

誰かあと一人飛ばしてた…！！
危ない危ない…！！

えーと…誰だ？

っ！！！！！！！

何でこの人まで！！？？

間違い…じゃないですよね…！？

なんで——なんであの人まで私の話に出て来てるの？？

…同じクラスメイトで、同じ部活サッカーの
『西野広都』にしひろと君。

スポーツ万能で頭よし性格よし顔よし。四字熟語で表すなら…眉目
秀麗、容姿端麗。

欠点は…

何もないです…。

加えるなら、サッカー部のキャプテン謙生徒会の副会長。あーんど、

父はみんなが知っている有名な病院の院長。そして母は有名な女優。

神様って嘘つきです…。

天は人に二物を与えず、とか言ってたじゃないですか！！？？

洋一でさえ、顔しか取りえがないし…由美でさえ…！たまーにどっか抜けてるところがあるんですよ…！！

それが彼は何！！？？

何で良いところしかないの！？
人間なの！？

と…疑ってしまうほど彼は完璧であり、モテています。

ついでに…、学校にいる女子の大半は、彼のファンです。

しかし、

私は小数派の人間なので…喋ったこともないけど！

彼が苦手です！！！！

基本、平和主義者の私ですが、

そりゃあ…私にだって苦手な人くらいいますよ！

完璧なんて…ムカつきませんか！！？？

…ぶっちゃけ私の場合、嫉妬なんですけどね…。

ま、何で西野君がここに書かれていたかはわからないけどもう来ることは――、

わかった!!

話しを、あらすじの方に戻しますが!!

私は担任^{しばかおり}芝香織に騙されて? 荷物を運んでいたんです!! そしたら偶然、誰かの告白現場に遭遇!!

私は女の子の応援をして（心の中でね）、その場を去ったのですが、その後すぐに泣きながら去って行く、先程告白していた女の子を発見…。

振ったのは誰だ!?!と構えていると、現れたのがなんと西野君!

多分、彼の告白シーンを覗いてしまったから…、後は何かの手違いで、彼の説明がここにあるんだと思います!!!

え？

彼があなたの運命の相手かもしれないよ…って???

アハハ！！

そんなこと絶対ありえません！！

第一、私が友達の好きな人を好きになるなんて…ありえません！！

え？

由美ですよ？だって由美、しょっちゅう西野君の話し出してくるんですよ。

ありゃあ…二人が恋に落ちるのも時間の問題ですよね…。

洋一？

それこそ、
ないない！！

幼なじみだけの存在で…本当に意識したこともありませんって！！
！お互いに！！

だったらあの家の人――？

…もしかしたら…そうなのかもしれない…！！

神様！！

ようやく私にも春がくるんですね!!???

え？

秘密??

なんだそりや…。

まあ、一話から今までの話しの説明はこれで終了!!

ここまで読んでくださったみなさん、本当にありがとうございます
た!

ついでにこれからも、
『私と彼と音楽と』もご覧になって下さい。

それじゃあ…

行ってきます。

【渡瀬陽菜】

終わり。

11話【私と西野君と】

ちらりと空を見上げると、そこにあるのは灰色の空。ところどころに染みがついているそれは、まるで誰から見放されたように点々と空中に広がっていた。

この染みの数を数えたことがあるのだろうか？と陽菜はぼんやりと思った。

一階で、人通りが多いのにも関わらず、その天井が明らかに汚れていたからだ。

――だれが掃除するんだろいなあ…。

陽菜は先程からずっとこの調子で空――天井を眺めていた。別に天井が好きだからではない。むしろ、天井をこんなにも飽きなく見続けているのは初めてだ。だから普段気付かないこのような染みや汚れに気がつけたのだろう。

…では陽菜は何でそれを、見ているのか？

先程も述べた通り、別に興味があるからというわけではない。

「…ここの天井汚れてるね…」

陽菜の耳の中に、陽菜と同じような考えをもっているらしい、誰かの声が下から聞こえてきた。返事を返すか否か迷った陽菜は、結局無視することもできず、「そうかなあ？」と、まるでピエロのように笑った。

「うん…、結構汚れてるよ」

しゃがんでいたはずの誰か——広都は、別に陽菜にそれ以上近づくこともなく、立ち上がると、ほら、と天井を指差してみせる。

「ホントだ…」

陽菜はさほど興味のなさそうな腑抜けた声を出した。そして、自分だってさっきまで同じことを考えていたくせに、わざわざ嘘をついてしまったことが少しおかしくて、心の中で笑った。それを表面には出さないように注意しながら——…。

広都と同じことを考えていたのが嫌だった。

見た目も中身も性別も生まれた環境も全て違う彼に、こんなことが分かるはずもないだろう。

同じことを思えば思うだけ、広都との何かの差が開いていくのだ。

この苛立ちは陽菜だけにしかわからない。

でも、陽菜自信も、どうしてここまで広都が苦手なのかが、よくわ

からないでいた。

由美だって、頭もよくて顔もよくて、スポーツができて：まるで女版の広都なのに、由美にはこのように――嫉妬することはなかった。

広都と顔を合わせるのが嫌なくらい、彼が苦手だった。だからわざわざ、天井を見ていたくらいなのに――、広都も同じものを見ていたのだと思うとなぜだか、悔しかった。

「ねえ：西野君？」

極力話しかけようとは思わなかった陽菜だが、どうしても気になってしかたがないことがあった。

「もう帰っていいよ？」

陽菜は（早く帰れ！）という意味を含めながら尋ねた。しかし広都は笑いながら、

「うん？別に大丈夫だよ？」

とあっさりと断ってきたのだった。

そもそもなぜ、広都がここにいるのかというと、話しは数分前にさかのぼる――…。



さて…

突然ですが！

みんなにだって、嫌いだなー、苦手だなーって思う人が、一人二人
はいますよね？

『いない』って答えられる人の方が、少ないって思いませんか？

私だってそんな…できた人間じゃないんだから、苦手な人くらいだっています!!

でも…

『いないよー』

なんて言いながら、心の中で

『あいつ最悪、』とか思ってる人よりは、ましだと思いませんか？

私…顔に表れやすい、って由美によく言われてるんですが、それほどまでにポーカーフフェイスができないんです。

まあ…ポーカーフフェイスとか、相手に表情を悟られなければ、…簡単にすると、目線を合わさなければいい話なんですけどね。

私それでもできないんです…。

明らかに目線を背けるだけ、だし…引き攣った笑いをしてるから一嘘とかもばれやすいそうなんです。

詐欺師には向いてませんよね…。

え？

結局何が言いたいかつて？

つまり…

もしも、

あなたの嫌いな、…苦手な人が目の前にいたりしたら…あなたはどんな反応をとりますか？

陽菜は今、まさにその状況に陥っていた。

目の前にいるのは、学校指定の制服を着ている、爽やかな少年。きつちりと学ランのボタンを絞めているのに、真面目すぎる、という印章を受けないほど、彼によく似合っていた。

真っ黒でさらさらな髪に、端正整った顔。背も高く、見上げるような形で視線を送ると、少年は綺麗な眉に皺を寄せながら、陽菜を不安げな顔で見つめていた。

「渡瀬さん…？」

低すぎず、しかし明らかに声変わりを過ぎているだろう少年の声。

「どうしたの？」

残念ながら、少年の声は陽菜の耳に届いていなかった。これはわざとなんかではなく…本当に聞こえていなかったのだ。

それはなぜか？

見とれていた、からなんかではない。

…さっきの質問に戻ろう。

私だったら…

「顔色が…良くないよ？」

青ざめます…！！
(BY陽菜)

陽菜にとって苦手な人物――…、それが目の前にいる、
西野^{にしのみろと}広都だ
った。

実は

広都のことが好きだった過去があり…、

ということもなく…、

実は

昔ひどいことされて…、

ということでもないが、

陽菜は広都が苦手だった。

なぜか？

それはあまりにも彼が完璧すぎたから――…。陽菜は広都に嫉妬していたのだった。

そんな苦手な人物を目の前にして、陽菜に一体何ができよう。陽菜はますます顔を青ざめながら、しかし広都のまっすぐな視線をそらせないままでいた。

「渡瀬さんー？」

ずっと黙っている陽菜に、大丈夫？と言いながら広都はそっと手を伸ばす。いつのまにこんなにも距離が縮まっていたなんて、今の陽菜が気付けるものでない。学ランの袖から長くて少しか焼けていない白い肌が出てきた。

陽菜は、その手を見て、同じ部活なのに、どうして焼けていないんだろう、と自分の真っ黒に焼けた肌を思い出していた。だから意識が『今』から少し飛んでいたのだろう。だから、その手が向かう先を、まるで人事のように眺めていたのだろう。すると、その手はゆっくりと陽菜に近づいてきた――。それは陽菜の頭に、正確にいうと額の部分に当てられた。ひんやりとしたものが頭に触れたことによって、陽菜の意識は戻った。

西野君が触ってる！！！！

普通の女子なら喜んで赤面するところを、

陽菜はさらに、顔色を青ざめた。

慌てて手を払いのける。
その際に

「大丈夫っす！」

なぜか男口調で返してしまった陽菜。陽菜は自分のやってしまったことに対して、後悔の念を抱いていた。

それは広都の手を払ったからではなく、自分のした行動が恥ずかしかっただけなのだが――、みるみる赤くなっていく広都の手を見て、今度はそっちの方に罪悪感を覚えた。

「あ…っ！！　ご、ごめん！！」

とっさにすぐ謝ったが、陽菜が手加減無しでうったのだから、女子だろうと多少は痛いだろう。嫌いな相手だろうといくらなんでもさすがに悪いことをしたなと陽菜は思った。

しかし広都は気にするわけでもなく、にっこりと笑った。

「これくらい平気だよ。それより渡瀬さんを驚かせちゃって…こっちこそごめんね？」

最後の部分はすまなさそうな顔をした広都。そんな広都を見て、陽菜が思ったことは（西野君…優しい…）でなんかではなく、

（あなたはどこかの国の紳士ですか？
本当にそう思ってるんですか？）

だった。

実は陽菜は、広都が腹黒いのではないかと考えており、本性を出さないのか待ち構えていたのだった。

「いやっ！私の方が悪かったし…、ーもうこの話しは無しにしよう！」

どうせこのまま続けても話しが長くなるだけだろう、と陽菜は察知し、またもや笑顔を作った。

「お互い様ってことで！」

「そうだね」

二人ともアハハと表面では笑っているが、陽菜の方は偽物の笑顔である。それでも笑顔を絶やさないように陽菜は注意していた。

ひとしきり笑った後、広都は陽菜に思い出したかのように尋ねかけてきた。

「そういえば、渡瀬さんはここでなにしてるの？」

「先生にね、…ちよつと頼みごとされてさあ、これ、一階まで運んで来たのはいいけど、肝心のドアが開いてなくて………鍵取りに行くのもだるいから、ここであつとしてたの。西野君は？」

これはちよつぱり意地悪な質問だと、自分でも思ったが、広都がどのような反応をするかが気になったのだ。案の定、広都は苦笑いをしなから

「ちよつとね…」と歯切れの悪そうな返事を返してきた。

「ふーん…」

なんて性格が悪いんだろう、と自分でも思っていたが、広都の困った顔を見ていたら、ますます自分が惨めに思えてきた。

「そっか」

「うん」

広都がそれ以上何も口を開かないということは…。もうお互いに用済みだろう、と陽菜は感じとり、広都に

「それじゃあ、鍵取って来るから」

と一応声をかける。すると広都も、

「それじゃあ」

と手を上げると、朝陽が去って行った方向と同じ所に向かおうとしていた。

そこで陽菜は思い出した。その先は行き止まりになっているはずだ。朝陽が去って行ったときは、慌てていて忘れていたが、冷静になつて考えてみると、朝陽が戻らない、今、二人を再会させるのは良くないのではないだろうか？

「に、西野君！ちょっと待って！」

広都は何の用事だろう、と後ろを振り返った。

「え、と…」

何か言わなきゃ！と思っていて、何かが突然うまく言えるはずもない。ましてや嘘をつくのが下手な陽菜なら、なおさらだ。陽菜は、あのとか、その、とか特に意味のない言葉を発しながら、しどろもどろに広都を引き止めていた。

「渡瀬さん？」

「あ、え…と、……その先は行き止まりだよ？」三年間も通ってるから、わかってるよなあ、と思いつつも、他にかける言葉も見当たらないので、しかたなくそう言うしかなかった。広都は困った顔をしながら、

「わかってるよ、わざわざありがとう。でも、今は少し一人になりたいんだ」

と言いながら、さらに少しずつ遠ざかっていく。
陽菜は、もう止める方法が思い付かなかった。

朝陽ちゃん…、ごめん!!

そう心の中で謝った瞬間だった。

「あ…、広都君…」

「朝陽さん…」

広都と朝陽が遭遇してしまっていた！
陽菜ははらはらしながら再び、二人の様子を見守るしか方法がなかった。

第12話【私と運と】（前書き）

大分時間あいてしまってますみませんでした。

第12話【私と運と】

朝陽と広都は、それは第三者の陽菜から見てもはっきりとわかるように、…それはそれは、とても気まずそうに御対面しているのであった。

…うわあ…なんだかお見合いみたい…。っじゃなくて！朝陽ちゃん
——っ！！本当にごめんっ！！

…もっと西野君引き止めておけばよかったあ！！

今頃何を思っている、後悔先に立たず。陽菜が今フォローできることは何もないのだ。今更仲立ちに入っても、『第三者』であるはずの陽菜に、一体何ができようか？例え、フォローをしたとしても、嘘のつけない陽菜は、下手をしたら先程のぞき見していたことがばれるかもしれない。

陽菜が今、フォロー以外でできることといえば、空気のように存在を消すか、もしくはこの場から去るか、ということだけだった。

——フォローはできないし、存在なんて消せるわけもないし…。と

りあえず！今は、この場からいなくなればいいかつ！

陽菜は後ろ向きになりながら、慎重に少しずつ後退していった。

広都に見つからないように一…、朝陽に見つからないように一…。

陽菜は恐る恐る二人から少しずつ遠ざかっていく。幸い二人ともこちらを見ていなかったら、陽菜はそのまま二人に気付かれることなく、足を進めることができた。廊下の最果てまで足を進めることができ、そして陽菜は突然、あることをひらめいた。

——っ！そうだ！このまま職員室に行っちゃおう！

陽菜はすぐ近くにある階段を見つけると、文字通り、階段を二段飛ばしで駆け上がっていく。誰にも会うことなく、ぶつかることなく、陽菜は脱兎のごとく駆け上がっていく。

——急げっ！！急げっ！！…、この場からいなくなるんだ、私！！

階段を全速力で駆け上がり、ようやくたどり着いた先は、先程まであんなに行くことをためらっていた職員室。人間、やればできるんだ、と陽菜は不思議なことに、感動したのであった。胸に熱いものがこみあがってくるのを押さえつつ、職員室のドアを軽くノックする。すぐに

「はい」と返事がしたため、ガラガラとドアが開けた。職員室の中にいるうちの一人の、ドアの手前の方に座っている先生に失礼しま

す、と声をかけるも、テスト期間のために入室禁止になっていたことを思い出す。

――そういえば、今日から部活休みだったな…。
忘れてた…。

記憶力がそうよくない陽菜は、テストの存在を今この瞬間に思い出していた。

あー由美が勉強のことなんか言ってた気がする…。

受験生であるはずの陽菜であるが、そういった類のことには全く無頓着であり、面談の度に叱られているのである。

進路がわからずに、幾度となく悩み、あーでもない、こーでもない、と今現在も自分自身に葛藤しているのであった。

心理学－医学－教育学－工学－文学
探せばいくらでもあるものだ。陽菜には『未来』の自分がどうしても想像できなかった。

私は未来にいるのだろうか？

生きているのだろうか？

何をしているのだろうか？

そして――――

隣には誰がいるのだろうか？

陽菜は座っている先生に鍵を取ってもらうと、すぐさま職員室から去って行った。

あ！

一階まで降りきった陽菜は、そこで改めて先程の出来事を思い出す。

西野君と――朝陽ちゃん…。

ここで、もし、いわゆるヒロインの子がいたならば――、胸がちくつとするとか、何も考えたくないわ！とか言って逃げ出したりするんだろうね。

甘いな。

私は何とも思わず、ドキドキもせず、…とりあえず早く終わってほしいかしら思わない。

つーか終わっていてくれ。

陽菜は鍵をぎゅっと握りしめると、壁に隠れて、ゆっくりとそこを

覗き込んだ――

誰もいなかった。

なんだあ、と嬉しさ半面、少し期待外れのようなものも感じながら、ちやつちやつと歩き始める。

少し足早になりつつ、今が昼休みであったことを思い出していた。

私まだご飯食べてないんですけど――！

香織に邪魔されたせいで、一口二口しか口にしていないのだ。空腹を堪えながら、急いで教材室へと向かう。

と、そこで陽菜は思わぬ人物と出会ってしまった。
教材室の前に座り込んでいる人物――

西野広都であった。

陽菜はその姿を見つけた瞬間、本当に石のようにその場でぴたりと固まってしまった。

――また会っちゃった――！！

陽菜は自分の運命を呪った。そして更に最悪なことに、広都も陽菜の存在に気がついたのであった。

第13話【私と時間と】（前書き）

前回からのすごい時間をあけてしまってますみません！しかも…これからしばらく時間をあけます。どうもすみませんでした。でも、絶対最後まで話しはもっていくつもりなので、安心してください（？）では、あまり進んでいないんですが、どうぞ…。

第13話【私と時間と】

こちらに気がついたはずの広都は、別段驚いた様子もなく、座った状態から立ち上がりうともしなかった。そして、無駄に（と陽菜は思う）にこやかに、陽菜に笑いかけてきたのだった。

「アハハ。…さつきは、…ごめんね」

謝罪の部分はどこか申し訳なさそうにも聞こえた。陽菜は、いやいや申し訳ないのは私のほうなんです。もう少し回りの配慮と、視野の広さと、あなたへの思いやりをもつべきなんです、と心の中で謝り返した。しかし、こんなことを実際に言えるわけもないので、陽菜はできるだけ表情を変えないように少しだけ息をついた。

そして、謝罪の代わりに口から出た言葉は、

「なんのこと？…別に、大丈夫だよ？」

と、堂々としらをきった返事だった。

そもそもさっきのことで、どこに私に対して謝る要素があるんだろう、と陽菜は今更ながらに思う。しかし何も反応を返してこない広都に、自分の答えがどこか不自然だったろうかと少し不安になる。

――なんか言ってよ！

目線で陽菜は訴えかける。が、広都はどこかに意識が飛んでいた。陽菜は、そんな広都の様子をじっとみてみることにした。

そこに座っている広都は、いつもと違った様子をみせていた。

広都は、ぼーっとした様子で視線を他の方へと向けていた。自分の数メートルも先のない窓から、ポカポカとした陽気が当たって心地んだろうか。

普段ぱっちりとか開かれているはずの目が、今は、薄ぼんやりとした感じてわずかに開かれていて、陶醉しきったかのような表情を作っていた。

西野君だって…、こんな時もあるか…。

欠伸を噛み締めている広都を見て、なんだかまるで犬みたいだ、と陽菜はこっそりと笑う。

こんな顔するんだ…

今、普段見慣れていないはずの陽菜にとって、西野広都を見れる良い機会であった。あまり本人と喋りたくはないが、見つめるぶんには問題ないだろう…。自分も腰をおとすと、数メートル先に座り込んでいる広都の顔を凝視した。

目の保養、目の保養、っと！

そう、単純に考えていた陽菜。しかし、その考えはすぐ崩れ去ったのだった。

あー、みんなが言うだけ、やっぱりかっこいいなあ…
とか、

意外と睫毛長いよなあ、とか、
見たことをそのままとらえていた陽菜だったが、そんな陽菜の視線を感じとったのか、突然に広都は陽菜の方へと視線を変えてきたの

だった。

は、
い？

混じ合う視線。

自然と高鳴る鼓動を止められないまま、陽菜はその視線をそらせずにいた。

広都の目と髪は、陽菜と同じ黒々とした色のはずなのに、それが今はどちらも光り輝いているように見えた。

――泣いているの？

思わず、

そう尋ねたくなるほど広都の目は光り、潤いをおびていた。それは、先程欠伸をしたことによって生じた自然現象なのだが、今の陽菜はそれを冷静に理解することもできなかった。

広都の桃色の整った唇が、ゆっくりと動く。いつのまにか、泣いているかどうか気になっていた目よりも、動き始めたそちらの方へと意識が向いていた。

「わたせさん、」

唇の隙間から出てきたのは、低すぎず、高すぎず、の『西野広都』の声。そこから発せられた音が、自分の名前を呼んでいるのだと気付くのに、数秒もかかった。

はっと、気がついた陽菜は慌てながら

「な、なに？」と返事をする。

どっかに意識とんでなかった？と笑いかける広都の顔を正面から見ることができなかった。

あんだこそ、さっき意識飛んでたでしょ！

とか

ねむたそーな顔してたくせに！

とか心の中で思っているはずなのに――…。

陽菜は顔を背けた。そして温度が上がった頬を冷まそうと、自分のそれに両手を合わせる。

恥ずかしい！

あんなにも西野君が嫌いなのに…！ 思わず見惚れてしまっていたのだろう、自分自身が許せなかった。例え見始めた理由が目の保養、だというくだらなさによ、広都に見惚れてのは事実なのだ。今の陽菜に、あんたも意識とんでたくせに！ などと言いつ返している余裕はなかった。

陽菜は広都の顔を二度と見るものか、と心の中で固く誓う。

ぎりっと歯を食いしばっている陽菜を余所に、広都は続けて口を開く。

「ねえ、…用事は終わったの？」

淡々と尋ねられた言葉に、何のことだ？と気になった陽菜は、思わず広都を見てしまう。

広都は笑っていた。

それは顔が赤くなっている陽菜を馬鹿にして笑っているのか、陽菜が答えやすいように、と笑いかけてくれているのか、陽菜には見当もつかなかった。

ただ、今、陽菜が思っていることは、どうしてもこの場から逃げたい、それだけだった。

「そこに用事あるんだけど？」

できるだけ冷静を装ったつもり声だ。

落ち着け、と自分自身に何度も唱えながら陽菜はすばやく立ち上がると、ゆっくりと教材室に近づく。教材室に近づく、ということは自然と広都に近づくことでもあった。逃げ出したい足を気持ちで押さえ付けながら、足を進める。

ドクンドクン、とする鼓動は一体どうしたんだろう？ともかく、広都が自分からこの場を離れてくれることを望んだ。

しかし広都は動かない。

いつのまにか、二人の距離は一メートルにも満たなかった。ぴたり、

と足を止めると、ドアの近くに座り込んでいる広都を気にしないようにしながら、陽菜はゆっくりとドアのぶに鍵を差し込んだ。

がちやり。

鍵の音が廊下に響きわたるほど、そこはとても静かだった。

荷物を中に運びこめば陽菜の仕事は終わる。

陽菜は鍵が開いたと同時に、自然と顔が緩むのを感じた。

――これで帰れる！

手早くドアのぶへ手をかける――。

が、

がしがし、と何度もドアの開き口である、凹んだ部分を横に引っ張るのだが、ドアは開かない。まるで窓のような形をしているドアは、木造のわりに意外と頑丈であった。全く動く要素がない。

もしかして、壊れてる――？途端に陽菜は顔が青ざめていくのを感じた。

――どうしよう！！

パニックになりそうなのを押さえ付けようと、ふーっとおもいきり息を吐き、がしがしと頭を掻く。慌てるな、慌てるな、と何度も心の中で唱えている陽菜を、今度は広都が凝視する。

「どうかしたの？」

「うん？なんでもないよ」

広都の顔を見ることがもせず、陽菜は答えた。実際はなんでもないことではないのだが（むしろ困っているくらいなのだ）、広都にそんなことを知られたくはないのだ。

ひーらーけっ！！！！

力のかぎり陽菜はドアを横に引っ張るが、ドアは一向に開く様子もなく、まるで固い岩のようにそこをぴくりとも動かせられなかった。

ドアを開こうと何度も挑戦し続けたが、それからは開く意志すら感じ取れずにいた。

途端に陽菜はずるずると廊下に座り込む。

――あーあ、何やってるんだろ…

早く昼食食べなきゃ、

早く鍵返さなきゃ…

早くいなくなつてよ、西野君…

「ねえ、渡瀬さん」

諦めている陽菜に話しかけてくる広都。陽菜は若干いらいらしながら、

「うーん？」と間延びした返事を返す。

「ドア壊れてたんだね」

「うん」

「…先生呼んでこようか？」

「…ううん、いいよ」

広都をこの場から引き離すきっかけだったのに、陽菜はなぜか、自分でもわからないが断ってしまった。

— 二 なんか、もうどうでもいいや…。

押し黙ってしまった広都を気にするわけでもなく、陽菜はそのまま

再びぼーっと天井を眺めることにしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8387f/>

私と彼と音楽と

2010年10月29日01時55分発行